

ネパリ・バザー 回 だより

第 18 号

ベルダレルネーヨ通信

1998 年 10 月

ネパリ・バザーは、ネパールを中心としたアジア諸国のハンディクラフト製品や食品の企画、開発を行い、継続的に輸入を続けることによって就業の場の拡大をめざすフェアトレード団体です。立場の弱い人々、女性、子どもの自立を支援し、貧困の課題改善に取組めたらというのが私たちの願いです。母体となるボランティア・グループ（NGO）であるベルダレルネーヨ（ネパールの女性の自立と子どもの育成支援の会）のトレード部門として1992年から活動しています。1998年2月からは、地球市民かながわプラザに直営店「ベルダ」をオープンして第三世界からの品々をご紹介します。

<特集>

女性と仕事シリーズ その1

「働く女性たち

ネパール・日本

講演会、

シンポジウム」



象使い・・・阿部修さん画

目 次

<特集> 女性と仕事シリーズその1

「働く女性たち ネパール・日本
講演会、シンポジウム」・・・ 2

「I F A T 情報コーナー」・図書紹介
・・・ 5

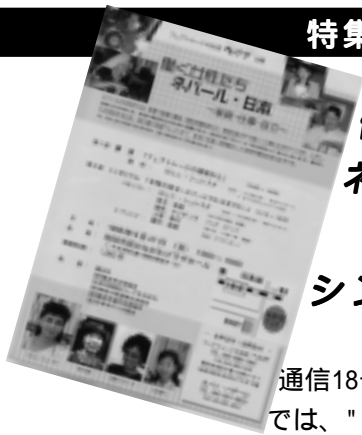
「生産者をたずねて」その7
ーJWDC: ミティエーラアートの世界ー
土屋春代・・・ 6

「子どもたちを訪ねて」魚谷早苗
・・・ 9

「ネパール料理教室」廣田麻紀子
・・・ 10

「新人紹介」マンディラ・シュレスタ
「お便り紹介」久田智子・・・ 11

「お知らせ・編集後記」・・・ 12



働く女性たち ネパール・日本 講演会 シンポジウム

通信18号から通信20号までは、「女性と仕事」の特集です。今回は9月27日に、地球市民かながわプラザでネパリ・バザーが主催した講演会とシンポジウムの内容を簡単にお知らせします。横浜市海外交流協会の研修プログラムにネパールから参加されているロヒニ・シュレスタさんを中心に開かれました。

演題： 働く女性たち ネパール・日本
- 家庭・仕事・自立 -

第1部 講演「フェアトレードの現場から」
講師：ロヒニ・シュレスタ

第2部 シンポジウム「女性の自立とは」
パネリスト：ロヒニ・シュレスタ、青木和美（ナマステの会代表）、マンディラ・シュレスタ（ベルダ店スタッフ）、土屋春代（ネパリ・バザー口代表）

司会：廣田直敬（NHKアナウンサー）

通訳：鈴木香子、山下亜紀子

第1部 講演要約 「フェアトレードの現場から」

講師：ロヒニ・シュレスタ

第三世界といわれる国に属するネパールは、第一世界の人々と比較してまだまだ厳しい生活と戦わざるを得ません。特に、人が人として生きる当然の権利が保障されているとは言えない状況がそこにはあります。その背景には、多様な原因がありますが、経済的に貧困であるということがその大きな原因のひとつです。経済的に貧困ということは、村では自給自足ができず、といって都市部でも失業者が多いということです。男性でも就職が厳しい社会では、女性は更に厳しい。そのような状況下であって、結

婚後もあえて仕事を持続けたのは何故だろうか。その答えをストレートに答えるには事情があまりにも日本と違い複雑です。そこで、フェアトレードで働き続ける生産者の具体的な事例を紹介し、私自身の苦労話などを通して、そこから日本で暮らす方々との違い、共通点を幾らかでも感じて頂けたらと思います。



講演をして頂いた
ロヒニ・シュレスタさん



社会における女性の立場

教育を受けた女性達は、16、17%です。はるか昔から男性を尊ぶ精神を背負った私たちの社会は、女性を同等にみなしていません。多少の教育のある家庭以外では、今でも女性は一人のメイドにすぎません。女性達にも（男性と）同じように、愛情や地位を与えなければならないという考えが、まだ一般的ではありません。息子に大変な価値を置いています。こうして、女性たちは生まれたときから虐げられているのです。一人の女性は、小さな子どもであっても、若いときでも、同じように家の世話に自分の身を置かなければなりません。息子達がよい教育、遊び、食事を受けていたとしても、娘達はそれから遠ざけられるのです。

女性の仕事と課題

以上みた女性の社会的立場では、仕事を持ち、自分なりの生き方をするというのは更に難しいのです。そもそも、教育を受けた女性達は大変少ないです。ほんのわずかな女性達だけが、職につくことができます。ネパールの女性達は、さまざまな種類の手工芸品を作る技術を持っています。しかし、もっとも大きな問題は、販売する市場をみつけることです。

仕事の市場拡大を目指すサナ・ハスタカラ
(フェアトレードNGO)の取組

その問題を解決するために、ユニセフの経済支援、専門知識の支援を得て、1989年に、サナ・ハスタカラは設立されました。サナ・ハスタカラは非政府組織です。この組織の主な目的は、手工芸品の卸売り販売と、手工芸技術の向上、そして生産者に対する経済的支援です。現在サナには、組織や地域グループ、個人合わせて100以上の生産者がいます。サナは、二つのショールームを通じて、国内販売と日本をはじめとする各国への輸出をしています。サナ・ハスタカラの総売上の30パーセントは日本への販売です。このようにして製品を販売して得た利益を、地域の発展に使ったり、生産者に原材料や機械を購入するために使います。また生産者の必要性を見て、トレーニングを施します。

<この後、フェアトレードへの協力や、生産者のご紹介、活躍する女性のお話が続きました。「生産者を訪ねて」でご紹介して行きます。>

仕事をはじめて3年後に、私は約30人の大家族を持つ夫と結婚しました。そして6ヶ月後に、職場で私の昇進の話がありました。それから2年後に、子どもができました。それで仕事を続けるのが大変困難になりました。大家族の中で家事をし、仕事をするのは大変です。しかし、その仕事なしで生活していくのは困難でした。また、ネパールでは仕事を得るのも大変難しいのです。夫の家族の中では、ほかの嫁は誰も職を持っていません。家を出るか、仕事を止めるかしなくてはならない状況になって、私は家を出る決心をしました。夫を説得し、理解してもらい、職場の近くに引っ越しました。

これからも、生産者の方々と共に支え合いながら、多くの女性の方々に仕事の機会が増えるように努力して行くつもりです。日本にくる機会を得て、大変感謝しています。

第2部 シンポジウム要約

「女性の自立～ネパール・日本～」

社会の中でしわ寄せを受けやすい立場にいる

女性や子どもが自立して生活して行けるようになるにはどうしたら良いか。それは様々なケースがあり、その回答を引き出すのは容易ではありません。それでも、これからの新しい社会を創造して行くためには、そのことも考えて行く必要があります。そこで、ネパールの社会と日本の社会、そして女性の状況をそれぞれのパネリストの立場、経験から語って頂き、お互いの社会の対比の中から、自立というものを考えてみることにしました。以下、スペースに限りがありますので、パネリストの方々の自己紹介とその方の背景抜粋、そしてフェアトレードとの関連性を以下ご紹介致します。

青木和美(ナマステの会代表)

私は真鶴で「まなづる生活学校」の一員として、消費者問題に取り組んできました。ゴミや資源の問題を追求していくうちに南北問題に突き当たりました。1986年、神奈川県企画する青年指導者派遣研修に参加し、インド・ネパールを訪問するチャンスに恵まれ、その旅がきっかけでもう10年以上ネパールと関わっています。ネパールの暮らしは物質的には貧しいですが、人々は本当に心豊かに暮らしています。日本は経済的発展と共に何か大切な物を失ってきたのではないだろうかと思いました。帰国後、一緒に行った仲間と「ナマステの会」を作り、まず私たちができることから始めることにしました。

私はまた、青年海外協力隊に参加し、スリランカのコロomboのスラムで2年間活動した経験があります。スラムで住民をまとめるのに実際に力を持っていたのは、女性たちでした。彼女たちの支えがあったから、私のボランティアとしての仕事成り立った、と言えます。

「自立」とは決して経済的自立だけを意味しません。むしろ精神的な自立が大切だと思います。自分で考え、判断し、自分の意見をはっき

、ã¼, |, é, ±, ÆA ©ª, ÉÓ/C, ð••, Â, ±, Æ, » , ê, ª

「自立」ではないでしょうか。

日本の中では時間の流れはとても早いし、画一的な尺度で物事が測られるし、生きにくいことはいろいろありますが、せめて日本で暮らしても他のアジアの国々の持つ豊かさを内面化して生きていけたら、と思います。日本の中でいかにアジア的に生きるか、それが私の課題です。そして、これからアジアの人々との出会いを大切に生きていきます。

マンディラ・シュレスタ（ベルダ店スタッフ）

私はネパールのカトマンズの出身で、ロヒニさんと同じネワール族です。日本に來まして9年になります。私は知り合いから、ネパールの女性問題、女性の自立のために支援をされているネパリー・バザーロのお話を聞き、私ができることであれば協力しようという考えで、今のお仕事を今年の1月から始めました。

ネパールはアジアの中でも非常に貧困でいろいろな面で貧しい国です。ネパールの女性は一般に家の中にいる時間が多く、ほとんど家の仕事で一生終わるといっても過言ではありません。そんな中で、伝統的な手工芸品作りを通して女性たちに仕事の面白さを知ってもらい、現金収入で生活の向上を図り、子どもたちを学校へ行かせるという事が必要だと思います。そのためネパリー・バザーロが行なっているフェアトレードというのは、ネパールの女性たちにとって良い機会であり、より良い生活を求めるには絶対に必要であると思います。ネパールの女性は自分から進んで外に出て、いろんな体験をして勉強をしていってほしいと思います。私も日本に來ていつも主人の後を歩いていた。しかしそれでは自分自身が進歩がなく、うちにばかりいては面白くありませんので、いろいろな人たちとお友達になりたいくて、外に出てお話をしたり日本の生活習慣を学んだり、自分から何でも進んでするようになりました。それにはいろいろな人々の支援、援助も必要で、今では非常にありがたく思っています。

最後にネパリー・バザーロを通してネパールの女性たちの橋渡しとして、力を合わせて支援協力を

していきたくと心から思っております。

<ネパリー・バザーロ代表の土屋春代は、紙面の都合で省略させて頂きました。>

フェアトレード

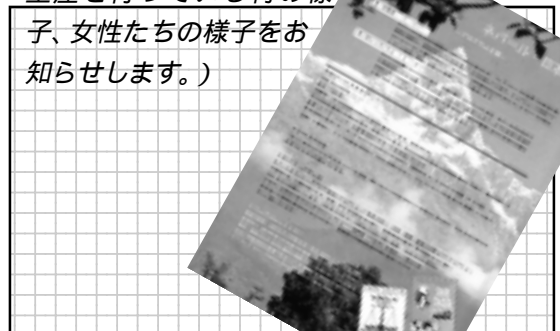
以上の様々な問題を突き詰めると、人間らしく生きるとは何かを考えさせられます。地球環境保護の重要な課題のひとつである人口問題にしても、女性の意識だけでなく、社会の習慣からの離脱や、男性の協力なしには解決できません。結局は、国、人それぞれの立場は違いますが、男女の関係にまで行き着くことになりそうです。

一方で、現実には貧困という社会的命題が存在しています。この解決なくして自立とは言い難いでしょう。その解決を目指して、水、電力、交通、健康、教育という分野で多様な支援や投資がなされています。女性への職業訓練などもあります。それらを継続的に支えるには経済活動（ビジネス）がある程度必要となります。利益を上げないとビジネスは機能できませんが、本来、利益だけがその目的でもないはず。その活動を通して地球の現状と未来、教育や文化など、大きな問題の改革に向かわなくてはなりません。

フェアトレードは女性の自立を考慮した活動をしています。女性の自立は、フェアトレードともこのように繋がって来ることを感じさせるシンポジウムとなりました。

（予告：通信19号は、今注目を浴びている自然素材のアローとは何か、その生産を行っている村の様

子、女性たちの様子をお知らせします。）



IFAT 情報コーナ

(INTERNATIONAL FEDERATION

FOR ALTERNATIVE TRADE)

通信16号で、フェアトレードの流れ、通信17号でIFATの組織の概要をご紹介しました。今回は、ヨーロッパでフェアトレードの推進役を果たしている4つの団体を取り上げ、その動きを追うことにしました。

ヨーロッパでフェアトレードに大きく貢献しているのは、FLO(Fairtrade Labelling Organisations International)、NEWS!(Network of European World Shops)、EFTA(European Fair Trade Association)、そしてIFATです。

NEWS!は、今年の3月にフェアトレードの統合的な規則をテーマに、ローマで会議を開きました。そして、NEWS!はもちろんのこと、EFTAやIFATを巻き込んで、基準やその基準を監視するモニターに関する討議がなされました。

その流れの中、以上の4団体は、ブリュッセルで、今年の5月末に、如何にそのフェアトレードの活動を前進させるかの会議を開きました。では、基準の実践をモニターする目的はなんのでしょうか。第1に、ILO(The Inter-

national Labour Organization)は、1919年から、労働基準を作り広める努力をして来ました。その基準があった故に前進があったといえます。第2に、フェアトレード団体(ATOs)は、1960年代より、貿易の実践をし、利益の前にまず自然環境保護と生産者の人々の保護に努めて来ました。それらの効果を定量的に把握できません。第3に、多くのNGOが、ATOsに協力してビジネスを進めて来ました。この割合が増えれば増えるほど、消費者からその透明性を求められるようになります。第4に、多くの国には、第三世界ショップが存在しています。そして、フェアトレードの輸入者から商品を購入します。その際のフェアトレードとは正しくは何か、ということが把握しやすくなります。第5に、一般の市場への参入の場合の製品の差別化を促進できます。

IFATは、この4月にオーストリアのザルツブルグで会議を開き、この問題を討議しました。モニター制度は、人手がかかるし、その基準が難解なので簡単ではありませんが、現在試案第2版まで発行されています。

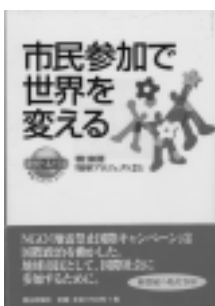
今回は、IFATのアジア地域会議がネパールで開かれた模様をご紹介します。

図書紹介

・@「市民参加で世界を変える」

朝日新聞社 定価1,700円+税

フェアトレードを理解するのに良い本を探している方にお勧めしたいのが、この本です。小説を読む、雑誌を読むような気軽さで、どんどん引き込まれて行きます。内容は大きく分けて5章からなっています。NGOの現場から、市民社会の根、日本の市民組織、なぜ市民組織が必要なのか、提言からなっています。今、注目を集めてい



るNPOの動きにも言及しています。日本を代表するフェアトレードの団体も紹介されています。先の「フェア・トレード」、「フェアトレードの本」と合わせてお読み下さい。

「ザ・ハニー・ハンター」写真集



天然の蜂蜜(ワイルド・ハニー)をとる狩人の写真集です。1年かけて彼らと暮らしを共にして完成した傑作です。見る人をその写真の中に引き込むダイナミックな映像は、読者を魅了することでしょう。

生産者をたずねて その7

J W D C

(Janakpur Women's Development Centre)

- ミティーラアートの世界

土屋 春代

再びジャナカプールへ

タライ（インドとの国境に近い平野部分の総称）の東にジャナカプールという町がある。観光客の殆ど行かないこの小さな町に埋もれていた宝があった。ネパール・インドに昔から語り継がれる一大叙事詩「ラーマヤナ」の主人公・英雄ラーマと美しく賢い妻シータが結婚したと言われるこの町の女性たちに代々伝えられてきた原始芸術「ミティーラアート」。

昨年の1月以来久しぶりに訪ねた町は3月の末であったが、さすがに亜熱帯に位置するタライは暑く、日中は半袖で過ごせた。カトマンズから遠く離れた生産者の状況調査を始めたマーケティング専門のNGOサナ・ハスタカラのマネージャー、チャンドラさん、人間が大好き、様々な人のくらしを伝えたいというフリーカメラマン、藤谷清美さんと3人旅であった。

ジャナカプールの伝説とミティーラアート

ネパールがたくさんの小国に分かれていた頃、タライにMaithil（マイティリ、特に絵を指す場合はミティーラと発音）という王国があった。ジャナクという英明な王が支配していた時、王女のシータがラムという神様に嫁ぎ大変に栄えた。この頃からジャナカプールと呼ばれるよう

になったというヒンズー伝説の町である。王女を奉ったジャナキ寺の祭りには毎年全国からたくさんの参拝者が集まる。その美しいムガル様式の寺はネパールというより、インドを連想させる。人々の顔もよく似ている。肌の色の黒い、目の大きなアーリア系の民族の彼らは話す言葉もマイティリ語、女性のサリーの着方もカトマンズと違う。カトマンズと大きく違うのは車の台数。空港に着くと我勝ちに客を乗せようと近づいて来るのはサイクルリキシャだ。町の中心のホテルまで走って10分。その間にすれ違う車は数台で、自転車、バイクが多い。もちろん殆ど人はひたすら歩く。外国人は珍しいので、ジロジロ見られる。初めてのネパール訪問でいきなりジャナカプールへ連れて来られた藤谷さんは、強烈な印象を持ったようだ。

リキシャで揺られながら左右の家を眺めると伝統的な土壁の家が目に入る。竹で枠組みを作り、わらを混ぜた土で塗り固めてある。白く乾いたその壁に象や鳥、人など、独特なマイティリの絵（ミティーラアート）が描かれている。単純な線で伸びやかにアウトラインを引き、陰影をつけず鮮やかに彩色して行く。代々、母親から娘に伝えられ、神々や動物、結婚式のような華やかな祝い事などを家の外壁や内壁に幸せを祈って描き継いできた。

カトマンズに住むジャナカプール出身の知人に聞くと、昔はどの家にも象がいて移動に使った。しかし飼いきれず、今では余程の金持ちの家でないといないという。壁画によく象が描かれているのはそのためか。昔は身近な動物だったのだ。

JWDCの果たしてきた役割

ジャナカプールの女性達の受け継いできたアートを商品化し、少しでも彼女らの収入を確保しようと1989年JWDCが設立された。4年前に現在のクワ村に移った。空港からも近く、広い敷地にジャナカプールの伝統的な家々がセクション毎に分れて並び、真中にチョウタリ（菩提樹等の大きな木の下にある休憩スペース）もあり、



明るく健康的だ。アメリカ、カナダ、日本等外国からの援助も多く、入りたい女性たちがたくさん待っている。昨年募集した時も数倍の応募があり、面接で15人に絞った。今ではメンバー80人が絵を描いたり、Tシャツやクロスにプリントしたり、茶碗やカップなどの焼き物を作ったりと働いている。新人のサラリーは800ルピー（法律で定められた最低賃金）。チャンドラさんは安すぎると抗議していた。私の意見を聞かれたが、この地域の物価、賃金から考え、又就業の機会のあまりにも少ない事を考えると、1人の収入を増やすより、多くの人に仕事を与えたほうがよいのではと思うと答えた。マネージャーのスーマン・シュレスタさんは、「新人には、特別な研修をしたり、作品の質も低く売るのが難しいなど投資が必要で800ルピーしか払えない。」と言っていた。

センターでは新人だけでなく毎朝9:30から1時間、識字教育や一般教育、経理やマーケティング等色々な研修をして資質の向上を図っている。メンバーの家族構成を聞いた時、子どもの数は2、3人だった。カトマンズは最近2人ぐら이가多くなっているが、地方はまだ多い。やはりJWDCで避妊指導をしているようだ。翌日村を訪問した時もセンターで働く女性の子どもは身なりもよく、学校にも行き、きちんとしていたのが印象的だった。

カトマンズでは最近カーストによる差別は少しづつ減ってきたと言われるが、地方ではまだまだ根強く、センターができて女性達が集まり始



ミティーラアートの壁画と子どもたち



絵の説明をするアヌラギさん

めた頃、カーストの違う人達がお昼を食べる時、穢れを恐れ一緒に食べられず家に帰ってしまった人もいたという。それが今では一緒に食事をしたり、仕事の相談をしたり、賑やかに、時には喧嘩をしながら共に働いている。

ラクシミプール村訪問

翌日はセンターが休みで皆家に居るので、この時とばかりにメンバー8人が住むラクシミプール村を訪ねた。朝8時過ぎに迎えに来てくれたアヌラギさんの案内で出掛けた。ホテルから村までリキシャで30分、ホテル周辺のバザールを抜けるとヤシの樹の間に広い道がインドへと続く。ネパールは小さい国だが、約36と言われる民族が暮らし、それぞれ違う文化を持ち、まるで異国に来たような雰囲気漂わせていてとても新鮮に映る。

村に入ると早速、あった！あった！マイティリの人の絵が。私達はリキシャから飛び降りるとカメラを向けた。壁の前に最初は一人しかいなかった子がアレヨ、アレヨという間に10人以上に増えた。外からの人など入ったことの無い村は大騒ぎになった。今回の訪問は藤谷さんというカメラマンが同行してくれたが、プロ用の大きなカメラを3台もぶら下げた彼女は注目を浴び、みるみるギャラリーが増え、村は興奮に包まれた。ビデオカメラを持ったチャンドラさんもまるで外国人。どこの国から来たのですか、と聞かれていた。リキシャには法外な料金をふんだくられるし、ほんとすっかり外国人に

なってしまったチャンドラさん。

印象に残った2人の女性

アヌラギ デビさん(60才) 4人の息子は独立し現在、義父105才、孫家族と暮らす。月収1800ルピー、設立以来のメンバー。

家族を紹介してくれたが、結婚したばかりの孫のお嫁さんは出てきたがらない。結婚以来1年間、1歩も外に出ていないそうだ。サリーで顔を隠し薄暗い部屋にじっと籠っているのだ。アヌラギさんが強引に外に出して、顔を隠しているサリーを剥がして、カメラに顔をむけさせたが、笑いながらも、恥ずかしくてどうしようもないという顔ですぐ逃げ出してしまった。サンスクリットカルチャーで夫以外の男性とは話もできないという、女性は家の中だけに留めておく社会だ。

アヌラギさんはセンターで働く前と今との違いをこう語る。「以前はサリーで顔を隠して暮らし、自分の足元の小さい地面しか見えなかった。今では前を見て周囲の風景が全部見える。仲間と一緒に、時には1人でさえ旅もできる。作品を作ることも、マーケティングもなった。自分の収入を得て、自信も持てた。どう生きていけばよいかもわかった」と。



姪を抱くプレムさん

プレム・ミスラさん(30才)12才で結婚。4年後に夫死亡。以来実家で暮らす。縫製担当。

センターから帰ると、兄弟家族の服や、近所の頼まれ仕事をする。同居している叔父さんに彼女は再婚しないのですか、と尋ねるとサンスクリットカルチャーで他の男性に嫁げないとのこと。カーストの低い女性は再婚することもあるが、プレムさんはカーストが高く、更に本人の意志もあり再婚をしないそうだ。

どの家もそうだが、外壁と同じく内壁も床も泥で塗り固めた家の中はよく整頓され清潔で涼しそうに見えた。亜熱帯のこの地域に相応しく作られているのだと感心した。

台所兼作業場にプレムさんのミシンが置かれ、きちんとたたまれた縫いかけの服が側にあった。立場のとても弱い"未亡人"の彼女が、仕事を持ち収入を得て家族の中にしっかり位置を占めて暮らしていることがうかがわれる。背をスッと伸ばして歩く彼女がとても頼もしく見えた。

メンバー一人一人の写真を撮っていた時、ある家の壁に他の絵と違う印象の絵があり意味を聞くと、2人の妻を持つ男が、争う妻達の1人をうるさくて殺しているところだという。シータやラム、クリシュナ、ハヌマンなどの神々、象、亀、孔雀、花等華やかで明るい絵が多い中で強烈な印象を受けた。この絵を描いた女性のことをうっかり聞き忘れてしまったが、どういいう思いで描いたのかと、今でもふと思う。

ジャナカプールにも最近いくつかの小さなグループができ、女性達の社会進出、組織化が始まっている。1989年設立以来辞めた女性は3人しかいないそうだが、そのうちの1人が別グループを作るなどセンターの果たした役割は大きい。何十年も時間の止まったような町だが、緩やかに、着実に女性達から町は変わって行こうとしている。



子どもたちを訪ねて

魚谷早苗

この夏、1年ぶりにネパールを訪問し、いつものように支援先の子どもたちを訪ねて来ましたのでご報告します。

【モーニング・スター・チルドレンズ・ホーム】

ここでは、ストリートチルドレンや家庭が貧しくて手放された子を、ビシュヌさんと妻のムナさんご夫婦が引き取って、家族として育てているホームです。子どもたちの人数は今では40人以上になりましたが、そこは「児童施設」の雰囲気はなく、「大」家族の温かさや居心地の良さがあります。

突然伺ったホームでは、ビシュヌさんはご不在でしたが、ムナさんと大勢の子どもたちが迎え入れてくれました。17歳になるジーヴァン君が1年の間に、少年から青年になっていてビックリ。最年長のアルジュン君が不在なので訊ねると、所属している教会の青年部のリーダーとして、シンガポールへ1週間の研修中だとか。海外研修という貴重な機会を得たことを、ムナさんや他の子達が誇らしげに報告してくれました。他の子どもたちも、皆元気に過ごしているということで、ホッとしました。

ビシュヌさんとは後日、街でお会いしてゆっくりお話することができました。ホームの子どもたちと一緒に話すのとは違ってお話もできて、有意義なひとときでした。アルジュン君と同じ年のプレム君は、今10年生、最終学年です。勤勉なビシュヌさんが「私にはできない」というほど、いつも本を手に



元気で明るい、笑顔のホームの子どもたち

している勉強家で、成績もトップです。10年生を終えたら、村で学校の先生をしたいと思っています。学年の高い女の子の中にも、レベカちゃんのように、看護婦になって村で働きたいという子がいます。村での暮らしは決して楽ではありませんが、ホームから巣立った子が、僻地のために働こうとしていることが、ビシュヌさんにとって、この上ない誇りのようです。

【ブワン君】

ブワン君は、私たちが学費と宿舍費用を支援して、カトマンズのバルナムーナという学校に通っています。今年6年生になりました。後で説明するミラちゃんと共に、6年前に支援を始めましたが、ミラちゃんはバルナムーナが7年生までなので、この春他へ転校しました。ミラちゃんがいなくなって、寂しくしていないかな？と、心配しましたが、先生にお話を伺うと、6年生になってから、勉強に集中力が増し、成績もアップしてきたそうです。勉強以外でも、友達とバスケットボールに熱中したり、楽しい毎日を過ごしているようです。

【ミラちゃん】

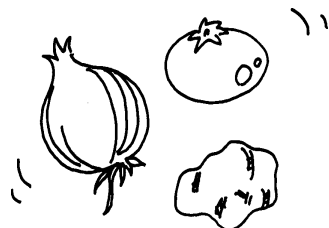
4月からスワティ・サダンという学校に転校したミラちゃんは、新しい友達もでき、成績もトップの優秀さ。今回は、お父さんが出張中で残念ながらお会いできなかったのですが、お姉さんと一緒に学校を見学させていただいた後、お宅にもお邪魔しました。お母さんのおいしいネパール料理をいただきながら、下手なネパール語でお話をしたり、ご家族の写真をを見せてもらったり。小さい頃は、恥ずかしがり屋であまり話もできなかったミラちゃんが、電話をすると「私に替わって！」と受話器を奪い、タクシーを呼びに走ってくれたり、しっかりして積極的になったミラちゃんを何よりうれしく感じました。

あ！
これおいしそう

ここで紹介しているカレースパイスは使う量ごとに小袋に入っているからとっても便利！
初めての方でもら～くらく。

簡単ネパールカレー・レ・シ・ピ

チキンカレー（4人分）



- * 用意するもの ・ 鶏肉 500 g ・ たまねぎ 1 個 ・ トマト 1 個
- ・ じゃがいも 1/3 個 ・ チキンカレーマサラ 1 セット
- ・ 塩 小さじ 1 杯 ・ 植物油 大さじ 1 杯 ・ 水 1 カップ

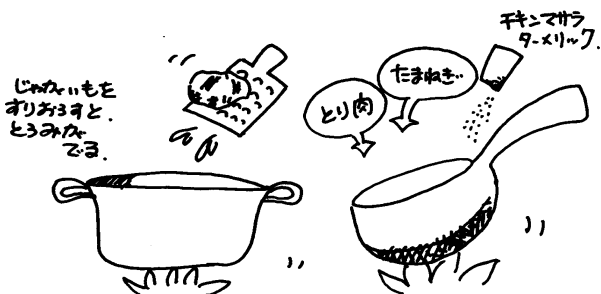
一口大に切った鶏肉にマサラ半袋、ターメリック半袋、塩少々をまぶしておきます。

すりおろしたジャガイモを加え、とろみを出したら出来上がり。

たまねぎはざく切り、トマトは小さく切っておきます。

熱したフライパンに油をしき、鶏肉を強火で炒め、たまねぎ、マサラの残り、ガーリック、ターメリックを加えます。

水を入れて沸騰したらトマトを加え 20 ～ 25 分煮ます。お好みでチリを加えてください。



ネパール料理教室報告

廣田麻紀子

去る8月7日、23日の両日「フェアトレードのお店・ベルダ」の入っている横浜本郷台駅「地球市民かながわプラザ」の調理室でネパール料理教室が行われました。

メニューはネパールカレー2種・トマトアチャール・青菜の炒め物ネパール風・ヨーグルトのデザートともりだくさん。

ネパールから来たベルダスタッフのマンディラさんを講師に和気あいあいと進められました。

ネパールの人になりきり、カレーを手で食べることにトライしましたが、なかなかこれが難しい。カルダモン入りのヨーグルトで一時ネパールの空気に触れられたような気がしました。



チキンカレーマサラ

4 人分 × 2 回分

450 円 + 消費税

ショップ「ベルダ」で扱っています。

遠方の方はお電話でどうぞ。

(送料別)

あっ、この人新しいのコーナー

ベルダのお店の新人 マンディラ・シュレスタ

この「フェアトレードのお店ベルダ」に来て早くも8ヶ月が経ちました。2月のお店オープンの際は、私が日本に初めて来た時と同じ様にハラハラ、ドキドキの毎日で、日本語もあまり上手ではないのにお客様の対応と最新式のレジの操作、日本語での商品説明など、毎日が勉強の連続でした。それでも、ネパリ・バザール口のスタッフの皆さんの暖かい支えがあったので、今日まで頑張っていて楽しく仕事をしてきました。

私が、ネパリ・バザール代表の土屋春代さんに初めてお会いし、フェアトレードについてのお話をお聞きした時、その前向きな意欲に燃える情熱に心を打たれました。フェアトレードを通じて、ネパールの多くの女性たち

に社会参加や経済・教育への関心などのチャンスが生まれ、更に、私がここで働くことでネパールと日本の皆様との橋渡しが出来るなら、是非、そうしたいと思いました。

ネパールの商品は、手作業によるものが多く手工芸品が主ですが、どれもネパールの各民族の独特な模様や色使いの特徴を生かしており、その伝統や文化を紹介しながら、日本の消費者の皆さんからいつまでも愛される商品を数多くご紹介していきますので、これからもよろしくお願いします。



マンディラ・シュレスタ：お店にて

ベルダレルネーヨの

お便り最新情報

ペラデニヤ大学医科歯科病院

久田智子（スリランカ）

通信16号と17号で、「4度目の村訪問記」を書いてくれた久田智子が、現在、スリランカにJICAの短期派遣技術者として滞在しています。この度、向こうの様子を電子メールで知らせてくれましたので、一部紹介させていただきます。

今、私はペラデニヤ大学医科歯科病院の手術室に勤務しています。ここは、私の他に9人の手術担当の看護婦がいます。今年の6月17日に赴任して以来75回の手術を担当しました。しかし、問題は山積みです。一番大きい問題の一つは、看護婦不足です。何度か12時間以上に及ぶ手術となりました。ですから、皆、手術を終えるまで長時間働くこととなります。

そして、翌日も普段通り働かざるを得ません。幸運なことは、皆、それでもいっしょけんめいに働いてくれることです。おかげで、私も元気に、そして共に信頼しあいながら働くことができます。

言葉といえば、看護婦たちは、あまり英語がじょうずではありません。彼女らは、普段、シンハラ語を話しています。患者もそうです。ですから、私はシンハラ語を勉強しなければなりませんし、看護婦のみなさんはいっしょけんめいに私に言葉を教えてくれています。お陰で、シンハラ語で上手に数えることができるようになりましたよ。

また、仕事のこと、日常生活のこと、色々お知らせしたいと思います。

フェアトレードのお店 ベルダは楽しいイベントが満載です!!

ベルダでは、国際協力やフェアトレードについて共に考えていくために、また、協力の対象となっている国々の文化的すばらしさをご紹介しますために、様々なイベントを行なっています。

アルチャナさんとア
ニールさんの
ネパール伝統舞踊
2月21日(土)

夏を楽しむ!!
タイ料理教室
6月7日(日)

インド更紗・布たち
のおしゃべり～染織
工芸と職人たち～
7月12日(日) イ
ンドで職人と共に伝統
的な染織を再現した
伊豆原文史からイン
ド染織の素晴らしさ
職人たちの現状につ
いてお聞きします。

親子で挑戦
ネパール料理教室
8月23日(日)
親子でネパール料理
を作りましょう。

ネパールの働く女性
たち ネパール・日本
～家庭・仕事・自立～
9月27日(日)
研修で来日中のロヒ
ニさんから、女性の
目から見た働く場と
してのフェアトレード
についてお聞きし、
2部でシンポジウム
を行います。

◎ これは楽しい!

ネパールダンス教室
11月23日(月) 祝日
創作スタジオにて、アニールさ
んをお迎えして簡単に楽しい
ダンスを習います。

<こちらへどうぞ!>
横浜国際協力まつり '98
とき: 11月14(土)12:30-17:00
15(日)10:00-16:00
ところ: 産業貿易センター1F
展示ホール・正面玄関パテオ
内容: 参加70団体の活動紹介
情報告知板
NGOよろず相談
アジアや南米諸国の音楽、
踊り、芝居などの紹介

至大船 至横浜
本郷台駅
地球市民かながわ
プラザ2F
フェアトレードの
お店 **ベルダ**
TEL: 045-890-1447
FAX: 045-890-1448

* 2月にフェアトレードの講演会、時期はまだ未定ですがインド映画上映も検討中です。詳しくは、ネパリ・バザーロまたはベルダにお問い合わせください。

国際理解にお役立て下さい。通信販売カタログ

ネパリ・バザーロでは、ニュースレターの発行、フェアトレード関連の本の出版、市民の方々の国際交流、支援の理解を深める活動も行っています。また、フェアトレードの活動に広くご協力頂けるように、通信販売カタログを作成していますので、ご興味がある方はご請求下さい。学校、教育機関へのフェアトレード商品の貸し出し、講演会、お話し会など、開発教育のご協力も実施しています。お問合せ下さい。

(編集の担当が一部変わりました。宜しくお願いします。)



今回、デザインを変えましたが、いかがでしょうか? 楽しく読みやすい紙面作りを心掛けていきます。(昌治)



夏以来ダラダラ気分の私です。「ネパール帰りだから」と言うには、もう1ヶ月以上経ってしまったし...。(早苗)



長引く日本、アジアの経済不況は骨身にこたえます。人の心を大切に思いつつ、新しい社会の創造に向けて進めたらと思います。これが難しい。(完二)



話題のインド映画「ムトゥー踊るマハラジャ」を観ました。満員の映画館は、映画の面白さに湧いていました。おススメです。(洋子)

発行所: **ベルダレルネーヨ**
ネパリ・バザーロ
247-0005 神奈川県横浜市栄区桂町 274-15
第2中山ビル 3階
Tel: 045(891)9939 Fax: 045(893)8254
http://www.yk.rim.or.jp/~ngo
E-mail: ngo@yk.rim.or.jp

1998年10月発行
編集責任者: 太田昌治
編集担当者: 土屋完二 魚谷早苗
春山洋子
編集協力者: 他スタッフ一同